

岡山県下初空襲と成都の B-29 部隊

工藤 洋三 空襲・戦災を記録する会全国連絡会議 事務局長

1. はじめに

岡山県下の空襲に関しては、これまでは、終戦の年の3月6日の空襲が初空襲だと考えられてきた。マリアナ B-29 部隊の日本本土初空襲は1944年(昭和19年)11月24日の中島飛行機武蔵製作所に対する空襲だから、その後の経過を資料でたどれば妥当な推測だった。ところが、1944年8月11日に、蒜山地方で1機の B-29 による空襲が記録されていることが最近明らかになった¹⁾。

本稿では、岡山県下初空襲だった1944年8月11日の蒜山地方に対する空襲が、米第20爆撃機集団の B-29 による中国の奥地成都からの空襲だったことを示す。同時に、広島県下初空襲の1944年11月11日の尾道空襲についても成都からの空襲であったことを示す。

2. 蒜山空襲の発掘

2019年7月7日、岡山県立記録資料館で開催された前原茂雄氏による講演「語りで描く蒜山陸軍演習場の実像」の中で、「美作唯一の空襲」として、1944年(昭和19年)8月11日午前1時頃、八束・大柄峠附近に B-29 が焼夷爆弾を投下したことを明らかにしている²⁾。一方、「中国からの飛来には燃料の問題で限界があった」とし

て、B-29 の発進基地や飛行ルートについては不明であると記してある。翌日の地元紙「合同新聞」が現地を取材しこの事実を伝えている¹⁾。

この時期、B-29 が日本本土に飛来するとしたら、中国からしか考えられない。しかし、中国の奥地成都からの空襲では、航続距離の問題から、北九州辺りまでが限界と理解されてきた。

3. 呉海軍警備隊戦時日誌の記述

まず日本側の資料から見ていくことにする。呉海軍警備隊の発足当初からの戦時日誌が残されていて、アジア歴史資料センターのホームページを通じて閲覧できるようになっている³⁾。1944年(昭和19年)8月の戦時日誌に蒜山空襲と関係した記載がある。戦時日誌では、「一般情勢」に以下のような記述がある。

8月11日大陸を基地とする敵米空軍は20機内外朝鮮南部、九州西部、北部山陽地方に数機毎に分散来襲、20日亦々60機内外にて北九州方面に侵入、何れも我制空部隊の邀撃に逃走するも敵の反抗意凶侮り難く嚴重なる警戒を要す

表-1 呉海軍警備隊戦時日誌の令達報告欄に記載された8月11日の経過³⁾

日時 発元	日時 受宛	令達報告等	記事
10日 西部軍	呉鎮	情報。A情報に依れば在支米空軍は何れかに出撃を企図しあるものの如し警戒を要す	無線
10日1936 佐鎮	佐鎮部下一般 各鎮	佐鎮信令第92号陸軍情報に依れば在支米空軍は本10日本土空襲を企図しつつあるものの如し。今夜特に警戒を厳にすべし	無線
10日 中部軍	2200 呉警	中軍情報甲第522号 1730不明機1基成都より出撃に向う厳戒を要す。1926、1936の間16機以上萬県通過せり	無線
10日 中部軍	2200 呉警	中部軍情報甲第523号 第5航空軍の通報に依れば2015安陸 B29 1機低空西北に進む 2017宜昌 4発 1機中攻 1機東進 2020荊門 B29 1機高空東進	無線
10日2340 呉鎮	部下一般	呉鎮管区警戒警報第1種発令	電話
10日2355 呉鎮	部下一般	呉鎮管区空襲警報発令	電話
11日 呉鎮	0025 部下一般	情報。2340敵機4ヶ編隊済州島西方100軒付近を東進中0015	電話
11日 呉鎮	0052 部下一般	情報0014敵先頭機隊壱岐上空後方に数編隊続行しあり	電話
11日 呉鎮	0147 部下一般	情報0140米子付近不明機東進	電話
11日 呉鎮	0300 部下一般	呉鎮管区空襲警報解除	電話
11日 呉鎮	0325 部下一般	呉鎮管区警戒警報解除	電話

「敵米空軍」とあるのは、正確には米陸軍航空軍のことで、この時期アメリカにも日本にも空軍は存在しなかった。以上の記述から、日本側が8月11日「北部山陽地方」に來襲した機が、中国を基地とするB-29だったことを把握していたことは明らかである。

同じ戦時日誌の令達報告欄には8月11日の経過が表-1のように時系列で記載されている。³⁾「佐鎮」とは佐世保鎮守府のことであるが、6月15-16日の八幡製鉄所空襲以来、日本側がさまざまな情報を駆使して、中国に前進基地をおくB-29部隊の本土空襲を事前に察知していたことがわかる。特に11日の午前1時47分には「情報0140米子付近不明機東進」という注目すべき記載がある。夜間のことであり、地元における「8月11日午前1時頃」という記録とほぼ一致すると考えることができる。

4. 第20爆撃機集団作戦任務報告書の記載

中国から飛来したB-29が所属していたのは、本拠を西ベンガル(インド)のカラグプール(Kharagpur)周辺に、前進基地を中国四川盆地の成都(Chengtū)周辺においた第20爆撃機集団(XX Bomber Command)である。創設当初から戦略爆撃に特化した集団で、戦域司令官の指揮から外れて、ワシントンの司令部、すなわち米陸軍航空軍最高司令官アーノルド(Henry H. Arnold)大將が直接指揮していた。

成都周辺には、長さ約8,500フィート(2,600m)の滑走路が作られ、新津(Hsinching)、広漢(Kwanghan)、邛崃(Kunglai)、彭山(Pengshan)に、それぞれ、第40、第444、第462、第468の群団が前進基地をおいた。⁵⁾カラグプールから成都までガソリンや弾薬を運搬するには、ビルマや雲南省北部の高峻な山脈を越えて空輸しなければならず、1回の空襲を実行するために、多くの日数を費やし、輸送機だけでなく、B-29にも輸送をさせた。

その第20爆撃機集団の作戦の詳細を記した作戦任務報告書が残されていて、8月10-11日空襲の背景や経過を知ることができる。作戦任務報告書には、8月10-11日は、もともとスマトラ島パレンバンのプラジョー精油所(Pladjoe Refinery)を最大兵力(maximum effort)、つまり100%の兵力で攻撃する予定だったが、これが50%の兵力に変更された結果、成都地域に駐機するB-29や蓄積された燃料などに余裕ができ、長崎市街地を焼夷弾で攻撃することになった経緯が記されている。長崎は「第20爆撃機集団のマッターホーン計画の第1目標で、焼夷攻撃のためには約76トンの焼夷弾で十分だった」と記載されている。作戦任務報告書には、なぜこの時期に焼夷攻撃を計画したのかについては記されていない。⁶⁾

1944年11月4日付のノースタッド(Lauris Norstad)将軍の覚書には以下のような記載がある。⁷⁾

8月10日に第20爆撃機集団は長崎の市街地に対して焼夷作戦を行ったが、それはこの作戦が焼夷攻撃



図-1 成都とサイパン島からのB-29の行動半径の比較⁹⁾

マリアナの基地が整備されるまでは、B-29は中国四川省の成都にあった前進基地から日本本土空襲を行った。マリアナの基地が整備されると東京や名古屋など日本経済の心臓部を攻撃できるようになり、硫黄島が米軍の手に渡ると北海道への空襲も可能となった。

に必要な情報と結果をもたらしてくれるだろうと期待されたからであった。しかしながら、この作戦は夜間にレーダー爆撃で行われたため期待する結果が得られなかった。

上記の内容からすれば、8月10-11日の長崎市街地空襲は、都市焼夷空襲のための試験空襲だったことになり、B-29が、焼夷弾を日本本土に使った初めての空襲だった。このことは、美作地方に「B-29が焼夷爆弾を投下した」という日本側の記録と合致している。¹⁾

図-1に示したのは、成都から空襲する場合、B-29の航続距離では北九州までが限界という初期の日本本土空襲を説明する際にしばしば使用される図である。成都から空襲できるのは九州が限界と考えられていた。

マリアナを基地にした第21爆撃機集団の作戦任務報告書は、戦争末期になると簡潔なものになり、1回の作戦が60%程度の報告書になっているが、第20爆撃機集団のものは、初期のものであるためか、臨機の目標攻撃などが詳細に記されていて通常100%を超える。

表-2は、作戦任務報告書の記述をもとに、8月10-11日の長崎空襲の概要をまとめたものである。長崎市街地を攻撃したB-29はいずれも編隊を組んで攻撃したものと考えられるが、佐世保、英山(Yingshan:北緯30度47分東経115度44分)、未確認目標についてそれぞれ1機ずつ攻撃している。これら3機のB-29のうち、英山を攻撃したB-29の投弾時刻は蒜山空襲の時刻よりずっと早い。佐世保については、1時16分投弾になっていて、日本側にも0時15分から1時45分の間に佐世保軍港上空にB-29が飛来した記録がある¹⁰⁾。さらに佐世保と英山を攻撃したB-29は基地に帰還したことも記されている。

蒜山空襲に関する直接の記載はないが、第468群団の1

表-2 1944年8月10-11日の長崎空襲の概要⁶⁾

群団	機数	爆撃目標	投下時刻		投下高度		目視爆撃	レーダー爆撃
			最初	最後	最高	最低		
40	5	長崎	0038J	0202J	16,000	16,000	2	3
444	7	長崎	0028J	0123J	18,000	18,000	2	5
462	7	長崎	0043J	0219J	17,000	17,000	3	3
	1	佐世保	0116J	0116J	17,000	17,000	1	
468	5	長崎	0033J	0113J	15,000	15,000	1	4
	1	未確認	0210J	0210J	15,000	15,000	1	
	1	英山*	2304J**	2304J**	9,000	9,000		1

* 中国湖北省(北緯 30° 47' 東経 115° 44') ** この時刻のみ 8月10日では8月11日.

表-3 1944年8月10-11日の長崎空襲における第1目標攻撃機の概要⁶⁾

都市名	作戦任務番号	攻撃日時	航空団	出撃機数(機)	目標到達機数	爆弾の種類と量		投弾高度(㍎)	損失機	目視爆撃(機)	目標上空雲量
						爆弾種類	第1目標に投下した爆弾				
長崎	6	8月11日 00:33-02:02	40	7	5	M26 422ポンド	15発	16,000	0	2	3/10 ~ 7/10
						M18 350ポンド	65発				
						M46 51ポンド	4発				
		8月11日 00:28-01:23	444	7	7	M26 422ポンド	20発	18000	1	2	
						M18 350ポンド	85発				
						M46 51ポンド	7発				
		8月11日 00:43-02:19	462	8	7	M26 422ポンド	24発	17,000	1	3	
						M18 350ポンド	104発				
						M46 51ポンド	12発				
		8月11日 00:33-01:13	468	7	5	M26 422ポンド	21発	15,000	1	1	
						M18 350ポンド	91発				
						M46 51ポンド	4発				

機のB-29が、8月11日2時10分に、未確認目標を攻撃したことが記されている。1時47分に米子上空で確認された23分後のことであり日本側の記録と矛盾しない。

未確認目標を攻撃した第58爆撃機集団第468群団のB-29は機体番号243号で、成都の基地に帰還途中燃料切れとなって、北緯29度10分東経111度10分の位置で墜落、乗組員は全員パラシュートで脱出し、その後無事に基地に帰った。墜落地点は、湖南省中北部沅江下流常德(Changteh)の北西約30㍎(48km)の位置で、成都まではまだ800km残っていた。予定をはるかに超えた飛行により燃料不足になったのである。成都から蒜山までの距離は、最短で約2800kmあり、B-29の航続距離をもってしても基地に帰還することは困難だったものと考えられる。

表-3に示したのは、8月11日の長崎空襲で使用された爆弾などに関する概要をまとめたものである。前述したように、この日の空襲は焼夷弾の試験空襲という目的があったため、投下された主な爆弾はM18集束焼夷弾(写真-1)で、日本の家屋用に開発されたM69焼夷弾を38発束ねていた。焼夷空襲においては、初期消火の段階で民間人による消火を妨害する目的で通常爆弾や破碎爆弾を混投するのが効果的であると考えられていた。このため破碎爆弾M41を20発束ねた破碎集束弾M26(写真-2)を投下したのである。蒜山空襲で焼夷弾が落とされたのは以上のような背景があったのである。

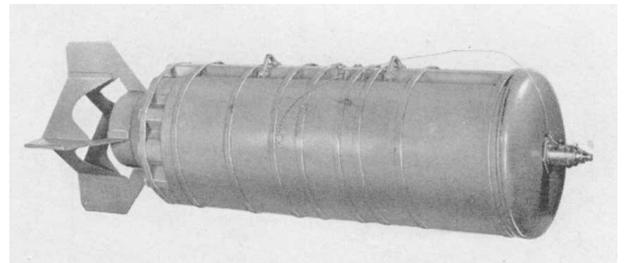


写真-1 M18集束焼夷弾

M69焼夷弾を19発ずつ2段で合計38発集束している。右端の部分が信管で、B-29の機内の搭載場所に設置したのち信管を設置することになっていた。(米国立公文書館)

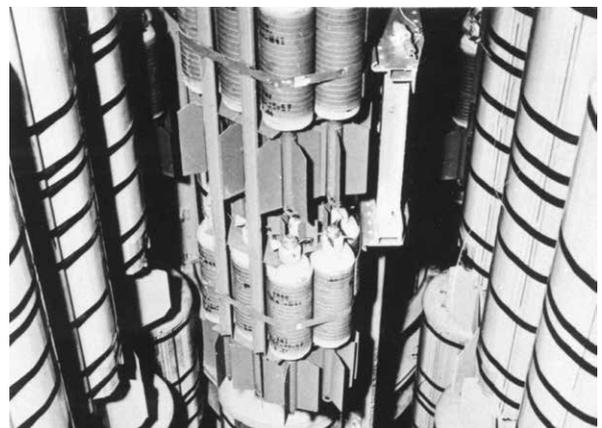


写真-2 B-29の爆弾倉に収まるM26破碎集束弾

B-29の爆弾倉内に収まったM26破碎集束弾(図の中央)。1944年11月29日。(米国立公文書館)

表-4 呉海軍警備隊戦時日誌の令達報告欄に記載された1944年11月11日の経過¹³⁾

日時発元	日時受宛	令達報告等	記事
11日 0853 呉鎮長官	11日 部下一般	情報 0840 濟州島西南 200 軒敵らしき編隊東に向ふ	電話
11日 0902 呉鎮長官	11日 部下一般	呉鎮管区警戒警報第1種発令 0902	電話
11日 0939 呉鎮長官	11日 部下一般	呉鎮管区空襲警報発令 0939	電話
11日 0955 呉鎮長官	11日 部下一般	0950 敵大型機福岡, 大村に来襲 0955	電話
11日 1013 呉鎮長官	11日 部下一般	敵大型1機広島湾に侵入 高度4000 1013	電話
11日 1120 呉鎮長官	11日 部下一般	呉鎮管区空襲警報解除 1130	電話
11日 1123 呉鎮長官	11日 部下一般	1120 敵は西方に避待せり 1123	電話
11日 1145 呉鎮長官	11日 部下一般	呉鎮管区警戒警報解除 1145	電話

表-5 1944年11月11日の大村空襲の概要¹³⁾

群団	機数	爆撃 目標	投弾時刻		投弾高度		目視 爆撃	レーダー 爆撃	指揮官 の指示
			最初	最後	最高	最低			
40	2	大村	0913J	1018J	25,000	22,000	0	2	0
	15	南京	0803J	1113J	21,500	19,500	3	2	10
	2	上海	1151J	1220J	21,200	18,000	2	0	0
	3	臨機目標	1005J	1238J	19,200	15,000	3	0	0
444	9	大村	0946J	1023J	25,000	18,200	1	8	0
	9	南京	0938J	1158J	25,000	18,500	5	0	4
	2	上海	0843J	1052J	20,400	19,000	1	1	0
	2	臨機目標	0804J	1254J	18,000	15,100	2	0	0
462	5	大村	0931J	0946J	23,000	20,000	0	5	0
	1	南京	1156J	1156J	20,000	20,000	1	0	0
	1	上海	1201J	1201J	17,000	17,000	1	0	0
	2	臨機目標	0945J	1204J	18,000	15,000	2	0	0
468	13*	大村	0936J	1025J	28,500	19,500	1	9	3
	7**	上海	0803J	1158J	22,400	18,000	4	3	0
	5	臨機目標	0939J	1440J	23,400	12,400	4	1	0

* 1機は臨機目標も攻撃した。 ** 2機は臨機目標も攻撃した。

5. 11月11日の尾道空襲

1944年8月11日の蒜山空襲は、岡山県下初空襲で、中国の成都を前進基地にした第20爆撃機集団によるものであったが、山口県や広島県の初空襲も成都のB-29部隊によるものだった。

B-29の日本本土初空襲、1944年6月16日の八幡製鉄所空襲の際に、山口県の角島(下関市)や下関市街地が攻撃されているので、山口の場合も初空襲は成都からの空襲だったことはすでに明らかになっている。

「新編広島県警察史」(1954年)¹¹⁾によれば、1944年11月11日、1機のB-29が尾道市原田村の山中に焼夷弾12発を投下、建物一部焼失が1件あったと記されていて、これが県内初の敵機空爆だとしている。また、尾道の原田小学校の学校沿革誌には午前10時に1機のB-29が焼夷弾12個を学校東方に投下したことが記載されている¹²⁾。

尾道に対する空襲についても、呉海軍警備隊戦時日誌の中にこの日の空襲のことが記されている¹³⁾。表-4は、その戦時日誌に記された11月11日空襲の経過をまとめたものである。そこでは、この日の空襲の主目標が大村で、「敵大型機」すなわちB-29は濟州島方面から来襲したことがわかる。10時13分に「敵大型1機広島湾に侵入」し、11時20分には「西方に避待」したことがわかる。学校沿革史に残る午前10時という投弾時刻と戦時日誌の10時13分という記載が、B-29が広島県に飛来した時刻が10時前後だということを示している。

表-5は、中国の成都に前進基地をおいた第20爆撃機集団の11月11日空襲の概要をまとめたものである。この日の第1目標は、大村にあった第21海軍航空廠、第2目標が佐世保の飛行機工場(90.36-834:Sasebo Aircraft Factory)と上海のポイントアイランド(Point Island)の石

表-6 1944年11月11日の大村空襲の臨機の目標に対する投弾記録¹⁰⁾

群団	機体番号	帰投時刻	臨機目標に対する攻撃内容
40	298	111902J	32° 35'N-121° 55'E で貨物船を攻撃
	589	111526J	34° 02'N-115° 58'E の目標に投弾
	466	111658J	濟州島の飛行場に投弾投弾
444	324	111423J	第2目標(上海)の南の飛行場を攻撃
	204	111705J	32° 55'N-117° 40'E の鉄道橋に投弾
462	830	111556J	32° 47'30"N-118° 01'00"E, 32° 55'N-117° 41'E 32° 57'N-117° 25'E の3か所の鉄道橋に投弾
	311	111629J	濟州島の飛行場に投弾
468	409	111621J	31° 46'N-121° 55'E で揚子江河口の船舶に投弾
	407	111718J	八幡地域に投弾
	487	111810J	濟州市の倉庫に投弾
	397	111418J	32° 59'N-117° 22'E の鉄道橋に投弾
	415	111753J	上海のリバーサイド(Riverside) 発電所に投弾

油貯蔵施設、最終目標 (Last Resort Target) に南京の埠頭地域が指定してあった。大村のほかにも南京や上海を攻撃したB-29が多いのはそのためである。第40, 第444, 第462, 第468の群団から、それぞれ、3機, 2機, 2機, 5機の合計12機が臨機の目標を攻撃していて、いずれの群団にも日本側の記録にある午前10時に攻撃した記録が残されている。

表-6はその作戦任務報告書から、臨機の目標を攻撃したB-29の機体番号や帰投時刻、投弾時の状況をまとめたものである。8月11日の長崎空襲と比較しても、臨機の目標を攻撃したのは12機と、数は比較的多いが、日本本土まで達して目標を攻撃したのは、第468群団の407号機だけである。この機は、長崎県の大村を攻撃予定のところ、コースを外れて福岡県でも東部の八幡を攻撃したことになる。実際には尾道に投弾したが、八幡に投弾したと誤認した可能性が高い。第468群団の最初のB-29が成都の彭山基地を出撃したのが11月11日の午前3時28分で、第407号機が着陸した時刻が午後5時18分、着陸したのは彭山の基地ではなく、燃料補給用の基地として使用されることが多かった梁山(Liangshan)(写真-3)だった。燃料不足のためと考えられる。

6. 11月11日の大村空襲の背景

マッターホーン計画では、最初の作戦任務である1944年6月5日のバンコク鉄道操車場、2回目6月15-16日の八幡製鉄所空襲を含め、9月26日の鞍山空襲まで、9回の作戦を実行したが、これらの空襲は第20爆撃機集団の第1期の作戦と呼べるもので、主に鉄鋼産業を攻撃した。この1期の作戦が終了した頃、戦略爆撃目標の選定に変更が生じようとしていた。カイロ会談での決定を受け、日本の降伏を早めるために戦略爆撃目標の見直しが進んでいて、鉄鋼産業から航空機産業に高い優先順位が与えられようとしていた。⁹⁾



写真-3 燃料不足のため梁山の飛行場で給油するB-29

成都の基地まで燃料が足りなかったため、不時着陸して梁山の飛行場で燃料の補給を受けるB-29。容量5ガロンのタンクを抱えた中国人が翼の上からB-29のタンクへ直接補給している。撮影日は不明。(米国立公文書館)

戦略爆撃の優先順位の変更は、正式決定される前に、第20爆撃機集団の司令官ルメイ(Curtis E. LeMay)少将にも伝えられた。第2期に当たる第20爆撃機集団の日本本土の目標が大村の第21海軍航空廠に集中しているのは、このような戦略爆撃目標の変更によるものである。

優先目標が航空機エンジン工場に変更された後は、成都から攻撃できる日本本土の目標が大村の海軍航空廠に限られたのである。最後に、図-2に本稿に登場した主要な中国および日本本土の地名を示した。

7 おわりに

本稿では、最近明らかにされた岡山県下初空襲である蒜山空襲について、米陸軍航空軍第20爆撃機集団の作戦任務報告書や呉海軍警備隊戦時日誌の記述に基づいて検討し、作戦の詳細を明らかにした。

これまで、成都からの空襲では、航続距離から北九州が空襲の東端であると考えられてきたが、岡山県まで飛来していたことが具体的に明らかになった。

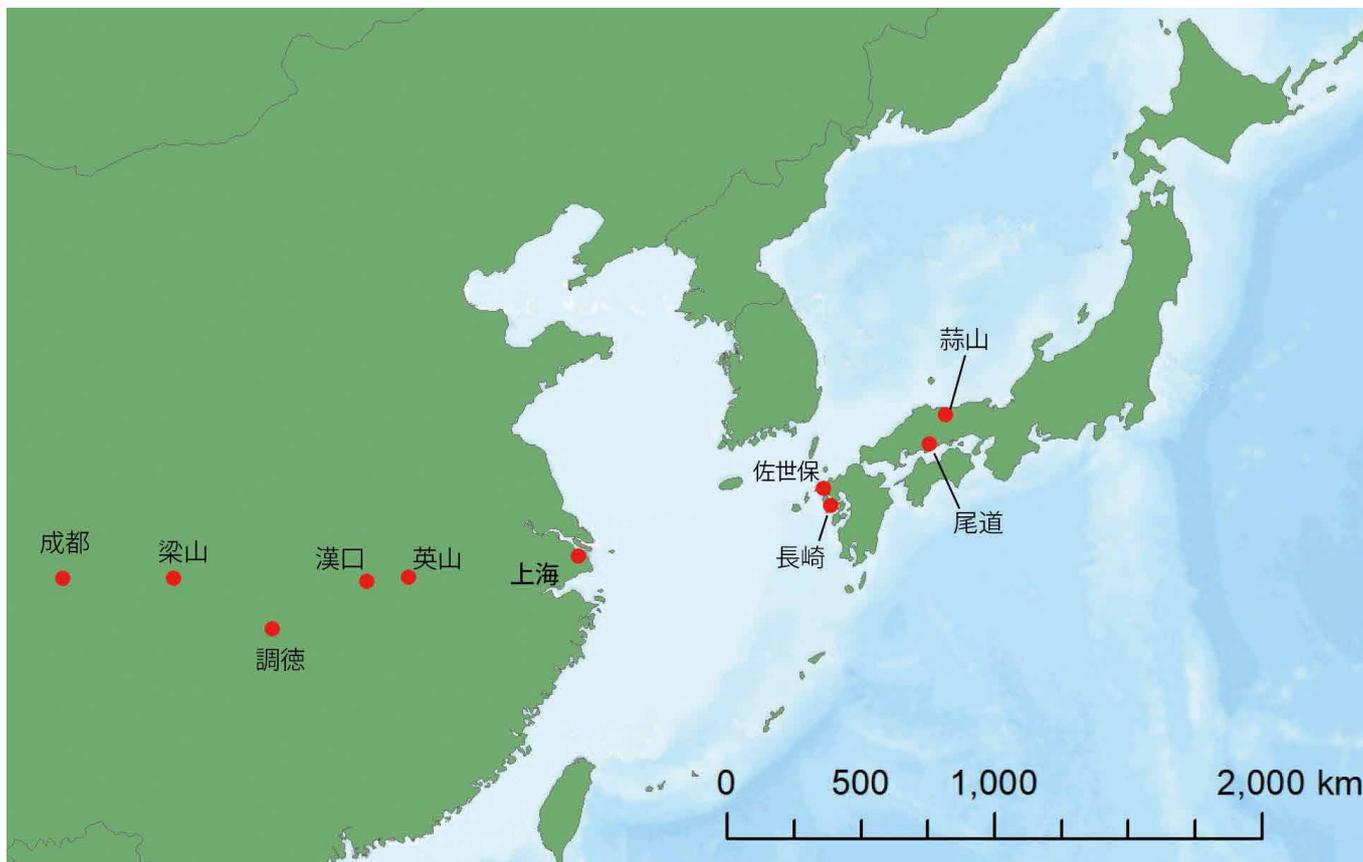


図-2 本稿で扱った日本本土と中国の地名を示す地図

参考文献

- 1) 前原茂雄, 蒜山原陸軍演習場と地域社会—語りで描く実像, 岡山県立記録資料館紀要, 第15号, pp.37-52, 2020.
- 2) 前原茂雄, 語りで描く蒜山原陸軍演習場の実像, 岡山県立記録資料館講演資料, 2018年7月7日.
- 3) アジア歴史資料センター
(URL:<https://www.jacar.go.jp/>)
- 4) 呉海軍警備隊戦時日誌 - 昭和19年8月1日～8月31日.
(アジア歴史資料センター ref.: code:C08030474600)
- 5) 北九州の戦争を記録する会編, 『八幡製鉄所空襲』, 2000年.
- 6) XX Bomber Command, Tactical Mission Report No. 6, Nagasaki, 10-11 August 1944.
- 7) Combs, C. E., Incendiary and Mining Operations against Japan (Memorandum for Gen. Norstad), 4 November, 1944.
- 8) 工藤洋三, 日本の都市を目標にした試験的な焼夷空襲, 『空襲通信』第16号, pp.24-33, 2014年.
- 9) Office of Air Force History: The Army Air Force in World War II (Ed. W. F. Craven and J. L. Cate), 878p., 1983.
(https://media.defense.gov/2010/Nov/05/2001329890/-1/-1/0/aaf_wwii-v5-2.pdf)
- 10) 佐世保海軍警備隊戦時日誌 - 昭和19年8月1日～8月31日.
(アジア歴史資料センター ref.: code:C08030480600)
- 11) 「新編広島県警察史」(1954年)
- 12) 中国新聞, 2016年8月16日付朝刊.
- 13) 呉海軍警備隊戦時日誌 - 昭和19年11月1日～11月30日.
(アジア歴史資料センター ref.: code:C08030474900)
- 14) XX Bomber Command, Tactical Mission Report No. 16, Omura Aircraft Plant, 11 November 1944.